

河合塾が教育支援しているカンボジア-日本友好学園の生徒の日本招聘は今年で3回目です。来日したのは、(写真左から)ソビアリットくん(16才)、ユットくん(18才)、ソリカさん(16才)、チュムナーくん(16才)の4名。8/30~9/9の11日間、京都・東京/広島・名古屋の各地を訪問し、交流をはかりました。



*** 京都合宿 *** 8/31(火)~9/2(木)
~ 京都の夜は長く・・・、塾生0B(大学生)と徹底議論~
京都のプログラムは、日本の仏教の学習会から始まりまし
た。静かな勉強会になる予定が、白熱した一夜となりました。



私たち日本人は、家の宗教やお寺や神社にお参りすることに対して深く意識をしていない人が多いのですが、カンボジアでは、普段の生活の中で密

接に仏教との関わりがあります。

このため、死生観

や輪廻転生、生活における仏教との接し方など、様々な質問が出ました。これには、日本人の方が答えに窮して、たじたじになる場面も。それでも、仏教という観点からお互いの文化や考え方の違いを学ぶことが出来、双方にとって、非常に有意義な時間を過ごせたのではないのでしょうか。最後には、金先生(世界史講師)が恋愛観について提議し、和やかなムードで締めくくることがとなりました。

*** 広島校「交流会」*** 9/3(金) ~ 「国の指導者になりたい!」 少年よ、大志を抱け~

広島校の生徒交流会には、20数名の塾生と講師が参加しました。まずソビアリットとソリカが日本語でスピーチ、続いて、塾生の代表が広島の歴史について説明をしました。2人ともカンボジアでの勉強や生活と日本での体験、自分の将来について述べ、将来になりたい職業について、ソビアリットが「国の指導者になりたい」と語ったことに対して、聞いていた塾生の一人が「私たち日本人は自分のことしか考えない人が多いのに、なぜあなたたちは「国のため。」に考えることができるのでしょうか」と驚きながら感想を述べていました。日本のことをカンボジアの生徒に教えるだけでなく、カンボジアの生徒から日本人が考えさせられることもある、双方が何かを得た充実した交流会になりました。



*** 陶芸体験(岐阜県多治見市) *** 9/6(月)

~ 国宝級の器を作っちゃいました! ~



この日訪れた虎渓窯は、本格的な陶芸体験ができ、初心者でも親切に指導して頂ける施設です。電動ロクロによる実演と説明を一通り聞き、いざ体験。はたして、大丈夫だろうかとの周囲の心配をよそに、とても始めて陶芸をしたとは思えないほど上手に器を作っていきます。カンボジアの生徒は一度見たことや、教えられたことのみこみが非常に

早い。30分程でそれぞれ立派な器が完成し先生からお褒めの言葉を頂き、皆、満足そうな顔。「機械で作った、形がきれいな器より形が歪んだ器の方がなぜ高いのですか」とユットから質問。先生が見せてくれた国宝級の陶器(形が歪んだ器)が非常に高価なものだということが理解できなかったようです。「機械で作るものは同じものが大量にできるが、すぐれた職人が手でつくるものはオンリーワンだから価値がある」と言うのと妙に納得した様子でした。

*** 羽島市立羽島中学校(岐阜県)訪問 *** 9/7(火)

~ カンボジアのおいしい食べ物は「ご飯とお茶」~

友好学園でボランティア教師として1年間英語を教えていた古田先生が現在勤務している中学校を訪問しました。英語・数学・社会・体育・美術・音楽の授業を参観。“Do you have ~?”を使った英会話のペアワークに参加したり、静かな教室で数学のテストと一緒に受け、ちょっと緊張した様子。でも、数学の得意なソリカは楽々クリアー。音楽の授業では、自動演奏の電子ピアノに驚いた様子で、カンボジアの学校でも音楽の授業をやって欲しいとピアノの前に集まりみな嬉しそうな顔をしていました。また、「カンボジアのおいしい食べ物と飲み物は?」という質問に、チュムナーは「ご飯とお茶」と日本語で答えました。さて、その返答から、日本の生徒は、お米以外は十分に手に入らないこと、ジュースは高価なので水やお茶しか飲んでいないこと、という彼らの現実を想像できたのでしょうか。





数学講師の現地派遣を実施しました

かねてより友好学園から「数学教師のレベルアップのため、河合塾の先生を派遣して研修してほしい」という依頼があり、この度、東京の数学講師・露木繁先生にボランティアで引き受けていただきました。



8月26日～31日の5日間で、午前はカンボジアの先生の研修、午後は生徒への特別授業を実施しました。午後の特別授業には、夏休み期間にもかかわらず、連日、70～90名くらいの生徒が集まり熱心に授業を受けていました。

研修を受講された先生からは「問題の解き方をいろいろな説明で教えるので分かりやすかった」、「違う解き方を教える方法は、今後の自分の授業でも試してみたい」など、分かりやすい授業とは、という視点で新たな発見をしていただくことができました。

カンボジアではポル・ポト時代とその後の内戦などの影響で、教員の不足と質的向上が大きな課題ですが、今回のような教員研修という取り組みも教育支援として重要であり、今後の支援活動の視点として考えていきたいと思えます。

日本で勉強したい！～日本語力の考察～

来日生徒の日本語指導(9/6(月)～8(水))担当:川畑貴子
カンボジアについて興味を持ったのは10年ほど前、オーストラリアの大学院留学中。内戦による抑圧が言語生活に大きな影響をもたらすという「カンボジアの民族と言語」が専門の研究者による話を聞いたことと、その後、別の大学院で研究中に親しくなったカンボジア出身の大学生が内戦の恐ろしい経験について私に語ったことからです。

今回、3日間という短期間でしたが、言語の四技能を複合した言語活動を行うために、普段の授業では導入が難しいコミュニケーション型アプローチを採用し、日本語運用力を高めるために言語使用状況による表現の違い等の説明を行いました。

4名とも学習意欲が高く、授業に積極的でしたので、初級学習項目の確認と復習に加え、少し難しいと思われる中級学習項目の導入を試みました。授業中は上手く使いこなせなかった文法事項も、翌日の授業で確認してみると、すべて覚えていることに驚きました。後日ホームステイ先の方に聞いたところ、毎晩就寝前に復習をし、翌日の授業に備えていたそうです。忙しい日程の中でも多くを学ぼうとする姿勢は今後の学習にもプラスになるでしょう。今回の来日で「頑張ってもっと勉強し、将来また日本で勉強したい」という新たな目標も生まれたようです。

日本人との接触により簡単な日常会話であればこなせますが、これから更に日本語能力を高めるには、中・上級レベルの日本語を習得させるための体系的な指導 日本語運用能力向上のために多角的なアプローチでの言語の四技能のバランス良い指導 日本への留学を希望する学生にはアカデミック・ジャパニーズの指導が必要 といった課題があります。



来日した友好学園生徒の後日談 (9月13日(月))

来日した生徒の帰国にあわせて、河合塾の職員3名で休暇を利用して友好学園を訪問しました。その際、生徒のご家庭(実家)へのご挨拶まわりもしてきました。

ユット君の家は学校から50kmも離れています。日本人がやってくる、というので、近くに住む親類縁者が大集合。たちまち、家の中は老若男女で一杯になりました。中でも、おばあちゃんは快活な人で、飛行機の話が不思議でたまらないらしく、「プロペラがないらしいけど、どうして空を飛べるんだい? 私は鉄の塊が空を飛ぶことがどうしてもわからないんだよ」、「食事が出て、トイレもあるなんて、一体どのくらいの大きさなんだい? この家ぐらいかい?」、「トイレの中身はどうなるんだい?」と質問を連発します。通訳さんがふざけて、「それはそのまま外に出るので、飛んでる飛行機の下で、『つめたい』と思ったら気を付けなさい」と言うと、「え～! そうかい。それは大変だ」と反応するので、一同、大爆笑です。

ユットのお父さんに質問しました。「将来、ユット君にどうなってほしいですか?」
(答)「今は納得のいくまで勉強してほしい。その後は(仕事は)何をやってもいい。農業を継ぐ必要はありません。ただし、政治に関わる仕事だけは、だめです。」という話が、いろいろな意味を含んでいて、とても、印象に残りました。

【会計報告】	2003年度	年間募金収入	940,861円
<使用金額>	教科書購入(寄贈)	1,107冊	100,540円
	生徒招聘(4名+通訳):	渡航費、滞在費など	778,897円
	(内訳:カンパ収入229千円)	総支出1,008千円)	残金 61,424円
	2004年度	前期(04.4-9)募金額	380,232円
～ご協力ありがとうございました～		残額計	441,656円



親類縁者の大集合

現代カンボジア事情

プノンペンで流行の「牛なべ」

友好学園のあるプレイベン州に比べるとプノンペンは大都会です。ネオンも多くなりました。週末ともなると、レストランで食事を楽しむ「家族連れ」で町は活気づきます。食べる料理やレストランの雰囲気は異なりますが、日本のファミリーレストランの情景とほとんど変わりありません。

さて、そのプノンペンで外食する時の定番メニューが「牛なべ」です。素焼きのなべをコンロにかけて、スープを入れ、牛肉、モツ、肉団子、野菜、香草、フクロダケ(きのこ)、油揚げもどぎ、中華麺、クイティウ(米粉で作った麺)を放り込み、ひと煮立ちさせれば出来上がり。追加の具材を注文すれば、スープを足して何回でも楽しめます。お店によっては、具材をせた皿を勝手にどんどん持って来て、空の皿の上に積み上げていきます。「わんこそば」のような感じで、「もう、いらぬい」というタイミングが難しい会計は空になった皿を数える、というシンプルな仕組みです。

もともとのカンボジア料理は、スーパや炒め物などが中心で、いわゆる「なべ」のような料理はありませんでした。ベトナムからなべ料理が入ってきて、それをカンボジア風にアレンジしたのが「牛なべ」。復興に合わせて、料理もどんどん国際化してきます。

